博士論文要旨

氏名	岸川　加奈子
学位の種類	博士（人間科学）
学位記番号	甲第 19 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 17 日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第 5 条 1 項の規定による
学位論文題目	風景構成法とバウムテストの比較 ～時代的変化による検討と「木」表現の比較～

論文の要旨

心理臨床の場ではクライエント理解の一助としてアセスメントが行われる。そのアセスメント手段でもある心理テストの中で、投影法に属する描画法は、一般的にパーソナリティや無意識の深い層を捉えやすいとされている。また、描画はアセスメントとしてだけでなく、対象者が絵を描くことを通して洞察を得ることにより、心理的な問題の解決やパーソナリティの変容といった治療効果が期待されるような、心理療法としての側面もある。特に、アセスメントとして描画が用いられる際には、課題画が選択されることが多く、またいくつもの技法が存在しているが、これらの描画法が淘汰されることなく、臨床の場で使われ続けているのは、それぞれの描画法に特性があるからだと考えられる。しかし、描画法同士を比較した研究や、それぞれの特性・どのような側面を見出すのに適した技法であるかを検討した研究はまだ少ない。本研究においては、風景構成法（以下、LMT）・バウムテストの二技法を、時代的な変化と両技法に登場する「木」の比較により、特性を見出そうとするものである。

研究１・２では、1987 年・2000 年代の異なった時代の５歳児を対象にして施行した LMT・バウムテストを比較し、時代的な変化について検討した。異なった時代の 5 歳児に対して施行した描画を比較することで、時代的な変化が捉えられると同時に、個々の技法の特徴も見出されることが期待できる。被験者は 5 歳児とし、1987 年・2002 年・2004 年に集団法で実施した。

LMT を用いた研究１では、LMT の構成度により分類し、統計的処理を行った結果、1987 年の方が構成度の高い絵を描いていた事が証明された。自我と LMT の構成との関連を統合失調症の描画を例に挙げながら述べた上で、構成により自我発達の度合いを見ることが可能なのではと考察し、時代による差が自我発達によるものである可能性を示した。

バウムテストを用いた研究２では、バウムテストの形態、特に幹・枝表現で分類し、統計的処理を行った結果、幹表現においては差が見られたが、枝表現においては有意な差は認められなかった。また、2000 年代の 5 歳児において、枝を描かず樹冠を描く子どもの増加傾向が認められ、近年の 5 歳児の特徴である可能性が示唆された。

研究１・２は同じ被験者群において行った比較研究であったにも関わらず、用いられた描画法により、差の表出の有無や新たな現象の表出があり、また、描画法それぞれに、反映されやすい個人の側面や特性がある可能性が窺われたことから、両技法に登場する「木」

の比較を始点に、技法の特性を見出すことを目的とする、研究３・展望研究を行った。被験者は 4 歳児・5 歳児・小学 2 年生・中学生・高校生・大学生とし、2002 年 7 月～2010 年 4 月に集団法で実施した。いずれも LMT→バウムテストの順で施行した。

研究３においては、バウムテストと LMT における「木」を比較するために、内容分析に対応する木の形態による分類、全体的評価・形式分析に対応する印象による分類を行った。印象に関しては、“描画を一見した際に同一人物が描いていると判別可能か否か”で判断した。これらの結果を、統計的処理した結果、形態においては、いずれの年代も異なった木を描くが、年少児・中学生・大学生では、同じ木を描く者が他の年代に比べて増加する傾向が認められた。印象においては大学生のみ統計的に判別可・不可に差がなく、他の年代は有意差があった。また、年少児・中学生・大学生は同一人物が描いていると判別可に分類される傾向が窺えた。どの年齢群においてもバウムテストと LMT では異なる形態の木を描かれることが多いことから、バウムテスト解釈を、そのまま LMT の「木」に当てはめることは現実的ではないが、大学生においては、同じ木を描く傾向が高まり、同一人物が描いているとの判別も半数が可能になることから、大学生の LMT における木に関しては、バウムテストの解釈を参考に出来る可能性が示唆された。また、LMT の木は、ある程度の構成がなされた後に教示され、登場することから「既にある関係性の中に描かれる木」と解釈し、個が現れやすいバウムテストに比して、対人関係的な側面が現れやすい可能性があると考察した。

展望研究では、研究３の分類結果に、川表現に特に着目した LMT 構成度の視点を組み入れ、検討を試みた。形態が同じに分類される者は、その年代で“構成度のより高い者に多い”ことから、自我発達度が高くなるにつれて、個人内での木のイメージが固定される可能性が示唆された。印象分類においても、同様の傾向が認められたが、中学生・高校生に関しては、学年により傾向がまちまちになり、大学生において、構成度が高くなるほど判別可の割合が増えるとの結果が得られた。

今後は、分類に際して用いた構成度分類表の精度を上げたうえで、さらなる考察を深めることが求められる。また、順序効果への配慮や個別実施による検討の必要性も指摘した。

博士論文審査結果の要旨

岸川加奈子氏の博士学位申請論文「風景構成法とバウムテストの比較～時代的変化による検討と「木」表現の比較～」は、臨床心理学分野の実践の中でパーソナリティの査定によく使われる描画テストであるバウムテストと風景構成法（The Landscape Montage Technique : LMT）という二つのテストに共通する「木」を手がかりとして、時代的変化における描画の変化やその意味、バウムテストに描かれる「木」と LMT のアイテムの一つとして描かれる「木」の異同とその意味について検討したものである。

バウムテストとは、Koch(1949)により発表された描画法で、A4 画用紙と 4B 鉛筆を使用して「実のなる木を一本描いて下さい」との教示のもとに木を描いてもらうものである。実施の容易さもあり、小川（2011）によると心理臨床の場において一番利用されている技法であり、診断の補助、査定の一つのツールとして使用されることが多いものである。

風景構成法は、中井（1971）によって考案されたもので、箱庭療法を描画に取り入れる形で開発された。描き手の心象風景を紙面に描いてもらう課題である。A4 の画用紙の四周をサインペンで枠どり・枠付けして「今から、私が言うものを一つ一つ唱える度に、この枠の中に描き込んで、全体として一つの風景になるようにして下さい」という教示を与える。そして、黒のサインペンを渡して川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石を順番に描くよう教示した後、足らないものがあれば描き足してもらい、風景が完成したらクレヨン（クレパスなどでも可）で彩色してもらうという手続きの描画法である。

本研究は、いくつもの描画実施調査のデータの蓄積に基づいているが、大きく分けると風景構成法とバウムテストを 1980 年代（過去）と 2000 年代（現在）に 5 歳児に集団実施して、風景構成法の時代的変化を検討した研究 1 とバウムテストの時代的変化を検討した研究 2、風景構成法のアイテムの一つである木とバウムテストの木の表現が同じ人物によって描かれたものと判断できるかどうかを手がかりとして 4 歳児から大学生までの発達年代ごとの風景構成法とバウムテストを分析した研究 3、そして、それらに基づく風景構成法の構成段階に関する展望で構成されている。

研究 1 では、風景を描かせる風景構成法を 5 歳児に実施できるかどうかを、描画の発達、言語理解の発達の二つの面から可能であると判断し、集団実施した。描画の発達段階を前羅列段階から平面的統合段階までの 7 段階に分け、評定を行った。その過程で、此岸なしの川と呼ばれる最下部に川を描く場合もプール、池状の川、波線の川、直線表現の川と三つの発達段階を見いだしている。また、結果としての構成の 7 段階においては、7 段階を０・１、２・３、４－６と大きく 3 つの段階に分けてみると、過去は１，２の段階が少なく 3 段階が多かったが、現在は１，２の段階が多く 3 の段階が有意に減っていることが分かった。その結果を、1980 年代の方が自我の発達段階が進んでいたと考えた。また、表現の豊かさや構成そのものの成熟度も低下していること、周りの子に影響されやすい子も、過去のように自分より段階の高い子の絵を模倣することが減ったとしている。そして、5 歳児でも風景構成法は実施可能であり、アイテム同士の統合の積み重ねの先に構成があると

考えて、風景構成法により自我発達の程度が測れる可能性について提言している。

研究 2 では、研究 1 と同様にバウムテストの時代差について検討している。その結果、幹表現、枝表現について分類してみると、過去においては、二線枝表現が多く樹冠表現（樹冠部を雲状、きのこ状に表現したもの）が少ないことと現在において樹冠表現が多いことが分かった。樹冠表現は、3 歳後半でピークに達するとされるが、本研究では、現在の 5 歳児群で多く見られたことから、安易に課題を完成させようとしていると考えられた。

研究 3 では、同じ「木」を描く風景構成法とバウムテストで同一人物が同じ「木」を描くのかどうか、形態による評定分類と印象による評定分類という二つの評定で検討した。形態による分類では、「同じ」・「似ている」を一つにして、「異なる」と比較すると、全体的に「異なる」とされる者が多かった。しかし、年少、中学、大学生はその差が少なかった。印象による評定分類においては、「判別可」・「判別できる可能性」をまとめて「判別不可」と比較した。その結果、二項検定では大学生のみ有意差なしで他は有意差があり「不可」が多かったが、χ 二乗検定では、年少、中学生、大学生は「判別可」「判別できる可能性」が相対的に多かった。年少児は発達的問題、中学生においては、個性を表現しにくく均質な表現になったと考えられる。しかし、大学生は印象において半数が判別可能になっており、異なった描画技法でも共通した印象を読み手に与え、同定が可能になったと考えられる。さらに、形態が異なるが、印象は同じという現象についての考察がある。一つは付属物であり、大学生にだけ複数見られた。それは、人格形成が進んでいること、健康な範囲内の自我肥大傾向等によると考えられる。また、タッチなどの筆跡、彩色表現も含めた運筆においても、個性が生まれ、筆記具の異なりを越えたものになると考えられる。大学生の風景構成法の解釈には、バウムテストの解釈を参考に出来る可能性も示唆された。両技法における「木」の違いについて、風景構成法ではある程度構成が出来た時点で木が描かれるため、すでにある関係性の中に描かれる木であり、個人的な面が出やすいバウムテストに比べると対人関係的側面が出やすいのでは無いかと考えられる。

展望においては、風景構成法の発達段階分類についての検討が加えられている。

博士論文発表後の口頭試問においては、申請者の研究内容について質疑応答がなされ、研究成果を確認した。そして、今後は、集団施行において得られた知見をベースに個人施行や臨床実践におけるデータを積み重ねて、風景構成法、バウムテストの特徴を踏まえた研究を展開していくことが確認された。今後の発展が期待される。

博士論文の発表内容と質疑応答、口頭試問の結果、公表されている学術論文なども踏まえて総合的に審査した結果、主査及び副査は、申請者の岸川加奈子氏が博士号（人間科学）を授与されるにふさわしいと判断した。

2016 年 2 月 2 日

主査　小林　哲郎　教授
副査　野嵜　玲児　教授
副査　鶴田　英也　准教授